

浄土

八月号

昭和十月五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一
昭和二十四月四月二十八日 運輸省 (特別扱承認
昭和四十年七月二十五日 印刷 昭和四十年



法然上人鑽仰会



聖観音（夢違観音）像

法隆寺

法隆寺の宝蔵殿には実に数多くの仏像がまつられている。救世観音や念持仏などを初めとして、どうしてこうもたくさん作られたのであろうか。みほとけをひとり専有したかったためであろうか。それはともかくとして、苦しみなやめる者が多かっただけに、みほとけも多く作られたことになる。上代人のなやみが、ひとつひとつの仏像に宿っていることを知れば、仏像の年輪が尊く見えてくる。

夢違え観音と呼ばれる聖観音は、悪夢をみたときに、この観音に祈って善い夢にかえてもらおうとした白鳳人の素朴な願いがこめられている。お経には夢は人間の迷いであると説いてはいるが、素朴な人々は自己のなかにうごめいているみにくい心情が、夢と交錯していることを無意識のうちに、みほとけの力によって清らかなものにしてもらいたいと祈っていたのではあるまいか。切れ長の眼とふつくらしたほほえみとに、心から信頼しきって、一メートルにみたない、この金銅仏に無限の慈しみを感得したことであろう。若々しいみほとけから、生きる喜びと希望にみちた明日への充実が息吹いている。

(石上善応)

—目次—

巻頭のことば 歳 月	(1)
随 想	林 竜淵洞・山中良子・小橋麟瑞 (2)
ヴェトナム雑観(1)	福島 淳喜 (4)
— . — . — . — . — . —	
座談会 生活と信仰	(8)
近世文名録 林 彦明大僧正	高橋 良和 (14)
仏教人生訓 母性愛と父性愛	宝田 正道 (16)
一言法談 ヴェトナムを救え	渋谷 賢応 (22)
旧盆のころ	村田嘉久子 (12)
浄土のこよみ	大橋 俊雄 (20)
創価学会手引 地方選挙に破れた創価学会	(18)
ご法語をいただく	村瀬 秀雄 (11)
弥陀のすがたに	吉田由美江 (32)
編 集 後 記	(33)
冢康と三河一揆	鶴田 湛泉 (24)
— . — . — . — . — . —	
日本浄土教物語 人間味豊かな良忠の生活	鈴木 成元 (28)



信あるものは大罪すら滅す。信なき者は小罪だにも滅せず。わが信のなき事をはづべし。

法然上人御法語

歳月

八月十五日は、日本人にとって、永久に記念すべき日である。ところが、二十年を経てみると、敗戦の実感はいすうすぎ、ふたたび異様な戦争の匂いが、漂いはじめたようである。記念日としての意義は、むしろ、このように記憶がうすれるにしたがって、かえって重要になってくるのではあるまいか。

才月は非常な重みをもつていると同時に、それ自身もひずみを生じ、歴史をゆがめることがある。戦後二十年のひずみが、日本人の心にゆがみをうみ出しはじめていることは否定できない。

あと二年で、明治維新も百年になる。一世紀の時間が、日本の近代化に及ぼした力は大きなものである。その意味で、維新百年を記念することは意義がある。しかし、それは同時に日本人の精神構造をゆがめもした。すくなくとも、日本仏教の変貌ははなはだしい。とくに今回の選挙を通じて、仏教の政治への傾斜はただことではない。そうしたなかで、本誌も三十周年を迎えた。もちろん、本誌自身にも歴史のゆがみを感じられる。しかし、三十年という才月の重みは、われわれに念仏信仰宣布の使命感となつて、ずっしりと、たのもしく感じられる。そして創始者真野正順先生はじめ多くの先駆者連の情熱がよみがえってくる。丁度、二十年前、八月十五日正午、東京の空はまっ青に晴れ、夏の太陽がキラキラ輝いていたのがいまもありありと目に浮ぶように。(信)

真夏の花

林 龍淵洞

真夏の花の色は強い。明るい太陽の光をはねかえすかの様に原色の花が多い。

真夏の空に咲いている花、夾竹桃の花の紅さが目にしみる。

少年の頃、東海の家の際に咲いていた紅い花、巾のせまい笹の様な厚ぼったい葉は濃い緑。幾日も照りつけられている沙漠の様にほこりっぽい庭に咲いている紅い花。異国情緒の強い花。多くの歳時記、植物図鑑はこの植物の原産地を東インドとしている。だが、私の目にふれた歳時記で、平凡社版の「俳諧歳時記」だけが、

『原産は亞布利加沙漠の緑地オアシスのもの、葉と根に毒あり、殊に家畜に甚し。花言葉は「注意」を意味せり。(下略)』と原産地をアフリカ沙漠にしている。

たまたまフランス文学の大家、吉江喬松博

日記

山中良子

(隆崇幼稚園教諭)

毎日つけるべき日記を、四・五日休んでしまった。不思議な事に、数年間、毎日続けて書いていた時は、日記をつけるのに苦痛を感じなかったのに、四・五日休んで、今夜からまた、つけ初めようと思っても、なかなか筆を取る気にさえならない。

習慣とは恐ろしいと思う。どんなに他の人の目から見て、大変な事のように思われるものでも、習慣として、やっている本人には、さほど、苦痛に感じることなく、行なわれるものらしい。何事も、初日、二日、三日を通りこせば、一年も二年も続けえるように思える。そう考えてみると、根気のいる良い習慣は、小さな時に、身につけておくべきだと痛感する。それと同時に、日記をつけていて、いつも考えてしまうことに「日記」というものは、案外、本当の「心」の中の中まで書けないものではないかしらということである。

古経堂に御聖像を

小橋 麟 瑞

(神奈川天宗寺住職)

あと十年たつたかたに、浄土開宗八百年を迎えることになった。その七百五十年を追うかのように、法然上人讃仰運動の一環として私が手を染めて完成したのが、油絵法然上人の聖像であった。

三年間の別時念仏、月二回の修養に過ぎなかったけれども、監修者の私も筆者の伊達孝太郎画伯も一生懸命であった。

昭和十年二月廿五日に完成して「あこがれのみ姿今し仰ぎ見れば、泪(なみだ)するなり泪するなり」と感懐の一首を物してから、早くも三十年を経過した。

筆者伊達孝太郎画伯も昨年八月六日、八十九歳の高齢で亡くなられて、私も無量の感慨に打たれた。その感想を中外日報によって三回に分載され、画伯をねぎらう一分の責を果たすことができた。

私はついさき頃、総本山知恩院の夏安居

士の記行文を見ていたら、

『我々が東京市内などで、よく街路の砂塵を浴びて咲いているのを見るあの紅色の夾竹桃はこのアフリカへ来て初めてその郷土に於て如何に楽しげに、またいかに誇らかに笑み盛っているかを見ることが出来る。この前には、既にこの大陸の東海岸に於ても接することが出来たが、殊にそれよりは一層サハラ大沙漠に近いこの地に於ては、更にその根源地に近く繁茂している自然さを思わせられる。』

と「沙漠の花」の中で、中央アフリカの西端のヴェルデあたりの記事に書かれている。

また博士は「北へ、危険の海へ」でも、アフリカ、フランス植民地セネガルのダカアル港のところで、この花のことを書かれている。

—第一次大戦時代の旅行記—

として見ると、フランスではこの花をアフリカの原産としているのであろうか。

いかにも、この花から受ける感じは、アフリカの沙漠のものだ。

かえって「自分で知っているから」「うそ」だと分かっているから考えて「うそ」を書いてしまう場合が多分にあり、又、自分の日記でありながら、他人に読まれることを、何時も意識して、心にもない「うそ」を書いてしまうこともある。こういう時は、本来の「日記」のねらいが、完全にずれてしまっている。自分の分身とも思える「日記」さえ、信じられないというのは、どういうことなのだろう。日記くらい、素直に、ありのままの自分を書くことが、出来ないのだろうか。そう考えると毎日、つけている日記が、徒労のようにも思えるが、しかし、日記にも、ゆるせない自分というものの存在を意識し、何ものにも侵かされない、一個の人間としての、厳しさ冷めたさ、そういう、頑とした、胸にある「何ものか」を、各自一線として、常に心に持ち続けているものだ、日記をつけたがら、感じられるのも、あながち私一人じゃないのではと思えるのだが……。それにしても、生涯のうち自分を素直に偽わることなく、出し得るといふのは少ないのだろうか。そう思うとたまらなくさびしい。

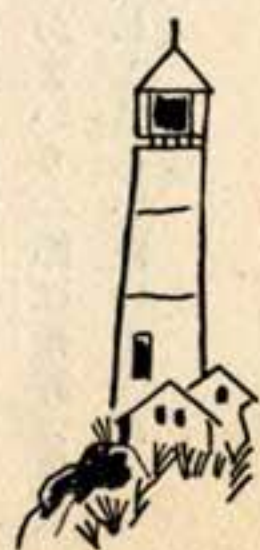
(げあんこ)に登嶺し、この機会に法然上人油絵の原画を献納することになった。六月廿五日、知恩院差廻しの自動車で山口教務部長のお迎えを受け、聖像を捧持して知恩院に入り、執事長以下一同の丁重な奉迎の中を進んで門主猊下の内仏殿に奉安して猊下の御回願を頂いた。

翌二十六日夏安居に参加せられた宗門の諸上人等一百二十名の参列を得て、門主猊下の御出座のもと、いと厳かに雪香殿に於いて贈献の式が行なわれた。回顧、念仏の後、猊下より感謝状と記念品を給わり且つ御丁寧なお言葉があり、私は多大の面目を施した。執事長曾和氏はこの聖像は永く知恩院の付宝として古経堂に奉掲することを約せられた。

最後に私が御挨拶して感謝の意を表し、小型原色刷版画の一部ずつ記念に贈呈大へん喜んで頂いた次第である。

知恩院におまいりの節は是非古経堂にこの御聖像を払してもらいたいものだ。

ヴェトナム雜觀 (一)



— 動亂のヴェトナムに使いして —

福島 淳喜

先月、久しぶりで安居先生と大正大学でお会いし、その際、ヴェトナムの話が出て「浄土」に出したいから書くようにと依頼されたが、「浄土」の雑誌であるから宗教上から見たものを書かねばならぬかとも考えたが、世間の雑誌類は戦争をあおるようなことが多く書かれているので、すこしヴェトナム国内の真实性の模様を記してみたいと筆をとった次第である。講演をするのであれば色々話をひろげることとも出来るが紙数に制限もあるので今回は雜觀を書いてみることにした。

昨年七、八月頃、南ヴェトナム共和国から日本に經濟援助の依頼があったので、我が国は申し入れを受けて經濟緊

急援助使節として私が使いするようになり、サイゴンをはじめ北ヴェトナムとの国境近くまでの各都市から農村をつぶさに視察して来た。

南ヴェトナム共和国内は現在、非常に疲弊しているので今回の援助は、かの国の民生安定、福祉増強の主旨に立つて物資をおくったのである。それ故、戦争に関係をもたぬ物資で、おもなるものをあげると、医療器具機械、医薬品類、特に福祉事業関係におくる救急箱一千箱、救急自動車二十五台、それに医師(長崎医大の外科医四人看護婦二人)トランジスタラジオ二万台、建築資材其の他で総額五億円の物資であった。

サイゴン空港に着いた時は多方面から非常な歓迎を受けたが、その中に多数仏教徒が合掌の礼をもって出迎えてくれたことは大変なうれしさを感じた。空港から大使館の車でサイゴン市に向け七キロの沿道を走った。街路は約三十米位の並木街路で各種の車の往き来も多く、自動車さて

はシルクス

(自転車の

前に人を乗

せているリ

ンタク)は

呑気そうに

相乗りの客

を乗せて走

っている。

沿道には民

家が処々に

点在し、子供達も元気よく遊んでいる。又ところどころに

沼もあり水牛の水あそびをしているのどかな風景を見なが

ら、サイゴン市内に入っている。市内は急に人がふえ自動車自

転車さては鈴を鳴らしたロバの乗合いなど目まぐるしく走

っている。街路には夥しく露店も立ち並び賑やかである。



サイゴン(塔の寺利舎)

東京の町中と変りがない。東京を出る時に外務省の人達から気をつけてくれ、身分は保障するからといわれた時は内心危険なところなのだなと思ったりして、行くのに少々不安を感じた。けれども来てみて市内の平穩な風物を見て、案に相違した感じであつたので安心感を持った程であつ

た。私の車はサイゴン市内中央目抜きにあるホテルキャラベル前にとまった。このホテルは国会議事堂(以前には劇場であつた由)前にあつて九階建ての最新式の近代設備の整つた一流のホテルである。私はここの五階五一八号室に泊ることになった。このホテルで私は奇跡的な命びろいをした。

それは三日目に感ずるところありサイゴン港に近いマジエスティックホテルに移してもらつた。

このホテルは大東京戦争のとき寺内南方総司令官が司令部としていたところである。ところが四日目の午前十一時頃市内に突然大音響があつた。私

は、とうとうベトコン戦が始まったかと驚きもし内心不安になった。ところが十分位たつとホテルのボーイがやってきてあなたの泊っていたキャラベルホテルが爆破されたと告げてくれた。早速、行ってみると五階以上は全部破壊され私が泊っていた室の窓からは赤いカーテンがチギレて

ひらひらしていた。早速、大使館に行ったところ各国の新聞記者など来ていて君はほんとうに運がよかったと無事を祝ってくれた。その人達に聞くとベトナムが日本使節にいやがらせのためにやったのだという。丁度、私の室の真上の六階の空室に時限爆弾を仕掛けたといっていた。ここに泊っていたらいまごろはあの世行きであったと想い出すだけに本当に運が良かったのである。これもひとえに仏祖のお蔭であったと現在でも朝夕の勤経には心から感謝感恩の誠を捧げている。

夜になると郊外からは小銃、機関銃、時たま迫撃砲の銃声がひっきりなしに聞えてくるのでなんとなく不安な気持ちにかられ、翌日大使館員に聞いてみたらこれは毎日のこととで気にすることは無いといわれた。これはヴェトナム掃蕩のためであるという。全国戒厳令が布かれ夜間は十時以後の外出は禁じられ街には歩哨が立ち物々しさがあつた。一般民衆は国内の戦争など、どこ吹く風というように少しも気に止めていないようである。

サイゴン市内の一番目ぬき通りでも又議事堂や市役所のある大通りの歩道には数しれぬ人々が寝そべったり、あぐらをかいて、ただボヤッとなに眺めるところなくすわりこんでいる。街路を通る人々の邪魔になることおびただし

い。どうしてすわりこんでいるかというとな職がない、働くところがない、動けば腹がへるのでじっと座り込んでいるのである。まるで抜け殻のようで虚脱失神状態である。その中で走りまわっているのは子供達で、その子供はいたるところで博奕をしているのを見かける。(サイゴン市内はヒッタクリ、博奕、淫売が多いといわれている)。子供達はみなはだしでいる。街路には飲食の露店も沢山に出ている。路上には洗面器のような形の鍋に粥より少し堅めの飯を入れて売っている。それが赤飯色か黄色である。皮の赤か、黄色の薩摩諸のふかしたのも売っているが買っているのをほとんど見掛けない。それほど難儀している者が多いことを物語っている。それでいて町の商店には商品は豊富である。日本製品の雑貨類は沢山ある。表通りに賑やかである。市街地がこんなことであるから農村では一層気の毒な者達ばかりである。住いは家といえないようなホツ立小屋に土間にわらなどを敷いてころがっているのが多い。食べるものは粉類多く自然の草木を混入している。我々が見たからにこんな生活はいやだなあと思う程である。農人はみな跣で、衣服にいたっては舐につけているという程度で女は乳房を丸出しにして農作業をしている。(ヴェトナムの農人は女が良く働くので男はなまけ者になる)住民達

は女小供年寄りのみが目につく。(現在、男は十八才から三十五才までは徴兵されているから少ない) 農人は国内の動乱など、どこ吹く風といったように少しも気に止めていないように見える。民衆は虚脱状態で長い間の内戦に内戦が打ち続き、どうしようもないのである。

ヴェトナムの内戦は約二〇〇〇年の間ヴェトナム人によっておこされたものは殆どなくすべて他国の侵略によって起されている。ヴェトナムの民衆はいつもそば杖をうけ戦乱の中に悲惨な境遇に泣かせられてきた。ヴェトナム人は大体、モングリア系で現在はインドネシア系との混血種が多いといわれている。昔はチベット地方にいた民族で、紀元前三三三年今のソ連にやぶれ一〇〇年かかって南下しトンキン地方に來たもので、それ以後、紀元二〇〇年頃には漢の高祖の配下となり、今から約六〇年前にはフランスの支配となり、いつも圧制に泣き続けてきた民族である。ヴェトナムの歴史は内戦に内戦が打ち続き半ば他国の植民地的存在で苛斂誅求の下に悲惨な境遇をうけ、夫は殺され、妻子は奪われ親子バラバラとなり、農村人は戦のある度に野に難を逃れ、子弟は戦場の露と消え安住の地を求めることも出来ず、大空を仰いで不幸をなげき明日も知れぬ、その日暮しをしている者が多いのである。それ故にヴ

エトナム人は虚脱失神状態の生活に泣いているのである。メコンデルタ地帯は昔から米蔵といわれているが、この国、最大の資源である米の生産は荒廃し、今から十五年位前には四〇〇万トンであったが、現在では内部動乱のために二七〇万トン位であるといわれ、農村の収入の道はますます少なくなり国内の疲弊困憊は想像できないほどである。(農業人口は九二五万人、総人口の八十五%。その中米作従事者が五〇〇乃至六〇〇万人という) こんな事情であるから農民はヴェトナムの手先きとなり、夜はヴェトナムと行動を共にし、奪略物を貰ったりして生活するのが楽だということになる。それ故、南ヴェトナム政府もアメリカ軍も困っている。私が滞留中はゴ・ジン シェム政権の倒れた当時のクーデター以後、一番物騒で一番困難な状態で市内各所の道路に防空壕が造られ、重要街路に鉄条網が張り繞らされ、サイゴン市内も動乱の巷になるのではないかと思わせる日もあった。内閣は総辞職する。デモは日に日に盛んになり学生のデモ、仏教徒キリスト教徒のデモが繰り返えされた。それが各々五千、一万という大群集である。特に学生のデモはさまざまに大学生のほか高校中学さては小学校の児童まで加わりなかには棒切れの先端に刃物をつけて担いでいる者など実に物そう極まりない物々しさの光景である。(つづく)

生 活 と 信 仰

道 正 田 宝

智 良 藤 佐

子 杏 沢 北

山 香 居 安

出席者

彦 昭 林 宮 司会

司会 それではこの信仰の形というものの、先程『生きる』という言葉がでしたが、この様な忙しい現代生活の中に信仰というもののどの様な形で受けとめていたらよいか、或いは仏教側からいうならばどの様な形で仏教は生されていくべきか、その点の一つ。

北沢 つい最近ですが子供が墓の話が出た折もしお母さんが死んだらどうなるのかというので、死んだら墓の中に入ってもう会えないといったんです。すると手を一生懸命握って会えなくなったら恐いから仲良く暮そうなどと小さい子供なんですという訳なんです。その辺に人間である以上、その様な信仰の芽があると思います。その様な芽は生活の中に沢山あるのですから何か方向を与えてやればよいと思います。私が住んでいる団地のことなんです、慶応大学のクリスチャンの若い先生が日曜日に集会場に子供を集めて歌などを歌っているんです。こういうことを近所の寺へ行けばいつもやっているとすれば大人も小人も行く様になると思います。そこで単に説法だけでなくPRすれば良いと思います

司会 小さい頃から宗教心をうえつけるということですね。

北沢 そうです。親子が死んだらこまると手を握り合っているだけではこまると思いますが。この様なことは日常生活にいつもあることです。この様なことは宗教が何んの抵抗もなく生活の中に入ってきたとするならば、そこに宗教心をうえつけることになるでしょうし、子供達にも何か示唆を与えることができると思います。

佐藤 良い話しを承りました。先頃シカゴの高野山別院に行った時その様な行事をやっていましたが、これはキリスト教の影響といえるかも知れませんが、この点を日本も逆輸入しなければと思いますね。

司会 話しは違いますが現在仏教に限らず宗教関係の書物がよく売れるという静かなブームだそうですし、又宗教の放送関係でも案外聴視率が高いそうですがこの様な現象はどういうことなんでしょうか。

宝田 それは息詰る様な現代生活の苦しさを何らの形で癒したいという気持があるためだと思います。昔は寺へ行ったり僧侶に話すこと

によって慰められるということがあったが、現在は教学の面では非常に高くなっているかわりに実践面では型式的な行事のみで実際の生き方とか悩みを指導するという接触の機会が非常に少なくなっていると思います。又仏教徒側からいうと仏教徒があまりにも宗門の中に籠り過ぎると思います 宮沢賢治ではありませんが『宇宙の無人』となつて進んで一つのマッチとなつてそれを一つの職場などに入つてともす、その辺りだけでも明るくすることによって仏教の実践を果していると思います。従つて昔は寺に入つて出家したが今は逆に寺から出てそこで小さな芽を一つ一つ育てていただきたいと思っています。

安居 佐藤先生の所では幼児を多山あずかっているのですが、その子供達がある程度の年齢になつた場合先生のところで教つたということがどの様な形で表われてきていますか。

佐藤 よく調べたことはありませんが、一例なんですが、戦後一時学生が非常に左寄りになつたことがありましたが、教え子の学生がその様なことよりまだ何か広いものがある様な気がすると幼い頃手を合した所へとやつて

きた人がありました……私のところでは特別なことはしないのですが、違つた広い世界もあるのだということを知らせる位は効果があると思います。

宝田 その様にあまり説明しない方がよいと



大正大学にて

思います。その方が役立つと思います。というのは将来ある危機観に對した時に昔のものが自然に出てきて対応する免疫ができていると思いますし、その危機観に對して自分の仏教に對する芽ばえをうまくだしてくると思ひ

ます。

佐藤 私はそういう意味でかならず仏教でなくとも本当にその人が救われ生活が出来るという、そのことが与えられればと思います。

安居 我田引水になります。が創価学会のことをやっていますと、何か既成教団が消極的な宗教PRにとどまつていることに気づくのですが……

佐藤 大体仏教の性格がその様なところにあるということなんです。

北沢 初めはそうではなかったのではないのですか。PRしようと思つてもお金の方が続かないのではないのでしょうか。

安居 痛いところをつかれた訳ですが、今いわれた様に例えば先のアパートでの日曜学校の様なものを我々が宗教者であると自覺して一つ一つ行なうという意味での積極性が大いに必要なのです。

北沢 クリスチャンはそういう意味で非常にありますね。

宝田 それが私のいう一本のマッチになれということなのです。自分の周囲の五、六人でもよいからそこへ出ていつて何か宗教的な雰

囲氣を与えることだけでもよいと思います。その人の周りにいたがために何か暖かいものを感じたという感銘を与える行為、そういうことができる人々がいたる所に散在することによって仏教が明るく甦えるのではないでしょう。

佐藤 先日朝日新聞が引用していたのですが本願寺にでている伝法ということの中で、良寛和尚が布教に行ってくれたのまれた時に自分にはその様な資格はないと、良寛和尚が涙を流して行った。子供達は感動した、という事が出ていましたが仏教というのはこういう性格が非常に強いと思います。ですからそういう法を純粹に守っていくという人がなくなつたということに問題があると思います。仏教は他のものを折伏するという性格もあります、仏教の寛容ということ、これも仏教の特色だと思います。

宝田 ですから人と共に泣いてやる、涙を流してやるという純粹な意味での宗教、それがほしいと思いますね。

安居 新興宗教が成功している一つの理由には指導者が専門の立場からおりて信者と共に

泣き合うという中にPRしているという点と
思います。

宝田 お互いの悩みとか不満をお互いにいい合う中に、その様なこともあったのかと涙を流し合うというところに一つの信念がでてくるわけですね。

安居 今の仏教者はもう一度昔の立場である土下座におりて歩く世界へいかなければならないと思います。

司会 そろそろ時間ですので、結論は出たようですがもう一言ずつ何かお願い致します。

宝田 結論として一言申しますならば、結局、信仰とは、トルストイもいつているように、『生命の力であり、人が生きてゐるのは、何ものかを信じてゐること』でしょう。つまりわれわれが生きていることを、超人間的な万物によって生かされてゐると受け取る場所から芽生える行動、と考へていいのではないかと思います。

佐藤 私も一言でいうならば内容的には確かにその通りです。本当に宗教人として歩む人が教団内に少ないということ、これは大いに反省しなければならぬと思います。

北沢 私はよく分りませんが、今日縁日などには若い人が多山行っている。しかしその若い人達は縁のないところで生活しているのです。だから縁のあるたび毎に機会を与え、その中にある彼らの芽を育てて生活の中に取り入れてやるということに成功すると思います。

安居 私は信仰という面について自身弱いのですが宗教者であるという自身はもっていないかならぬと思つてゐます。どうも寺に生かされてゐるという喜びを感じながらも、そういう自信なさは何をやってもだめであるとしてしまひますが自信をもつことによつてあらゆる機会に出さねばならぬと思ひます。ですから常に目先のものの一つでもよいから自信をもつて歩んでいくことが自分自身にとつても信仰であるし、それが人を救う道であると思ひます。

司会 どうもいろいろな御意見ありがとうございました。この生活と信仰とを結びつけることは我々宗教人としても仲々むずかしいことなのですが、科学が発達し機械化されつつある生活体のバックボーンとして信仰の重要性が増々認識されてくると思ひます。

ご法語をいただく

仏をうらむ事は、あるまじき事にて候な。
答。いかさまにも、仏をうらむ事なかれ
信あるものは大罪すら滅す。信なき者は小
罪だにも滅せず。わが信のなき事をはづべ
し。

(百四十五箇条問答)

仏さまさえうらみたくなるとは、よくよく
のこととあります。それにしても仏さまをう
らむことはいけないことでしょうねと、半ば
反省しながら法然上人に申上げたのが、この
質問であります。どんな理由があつてのこと
かはここでは判りません。しかし他のご法語
には、熱心に祈願をこめても一向に仏さまが
ご利益を下さらぬのでうらめしいという質問
があります。何れにしてもこちらの気持が仏
さまに通じないという不満から出たのでしょ
う。

しかし阿弥陀さまは、人間の病気を治して
下さったり、お金儲けをさせて下さる仏さま
ではありません。お念仏を申せば、凡人とし

て避けることのできない罪を滅して下さるの
であります。

罪といえは普通は法律にふれる行為のこと
をいうのでしようが、ここではもっと広い意
味で邪念悪行といったものをいいます。そし
てそのよつて来る原因は、むさぼる心、怒り、
愚かさの三つにあります。こうした凡人の心
から生ずる悪業のすべてが罪というならば、
これまた凡人の誰もがもっているものであり
ます。こうした罪から逃がれるには、お念仏
を申し申し生活するしかありません。

仏さまをうらむより、その前に己が信仰の
浅いことを恥すべきであるといわれたこのお
詞は痛烈なお詞と申す外ありません。他のご
法語に「信のあるなしによりて、利生はあり」
とあります。これは仏さまのご利益が受けら
れるかどうかは、自分の信仰次第であるとい
うこととありますが、普通にやさしく教えら
れたという感じがします。

逆境にたち、ことごとくに失敗を重ね、どうに
もならなくなつて仏さままでうらめしく思う
というこの人には、まだしも精神的救いを求
めている人といい得ましょう。ところが目の

前にある世相はというと、不平と不満とから
他をうらむ心でみちみちています。対立と抗
争、不信と侮べつの中にあつて、他を傷つ
け、自分も傷つきながら、その間に少しの反
省もない場合が多いのです。お念仏を申すに
は、その前に仏教徒でなくてはならぬことは
いうまでもありません。常に反省し、己れの
足らぬ点、間違つてゐることを知らなくては
なりません。それと同時に仏教徒としての責
任を果さなくてはなりません。

「悪業をものはばからず。行すべき慈悲をも
行せず。念仏をものはばまさゝらん事は、仏教
のおきてに相違する也」

と仰せられてゐるお詞は、一見当然のこと
にすぎないようですが、当り前のことが当り
前に実行し難いのが日常の生活であります。
他をうらむ前に自らを反省してそれだけのこ
とを実行しているかというのであります。

お念仏を申せば大罪も滅するといわれたこ
とは、もしそうでなかったら、仏教徒として
の責任を果さず、お念仏を申していいので
ないかと、反問されたお詞といつてよいと存
じます。

(村瀬 秀雄)

旧盆のころ

村田嘉久子

ほんの十六日に

珠数の緒が切れてはな緒が切れて

南無釈迦如来手で拝む

これは二上りの調子で単調な節ですがよく芝居で田園風景の場の幕開きに使われる下座の唄です。

男の子や女の子の小さいのがお盆の提灯を持って通りぬけるだけ位の場面ですが、如何にも田舎のお盆らしい感じのする下座で（お囃子）私は好きなのです。

またもう一つ別にこれは三下りの三味線で、

田舎の庄屋さんに立止り

旅の坊さん回向する、なんまいだ

婆さまが出て来て弘法さんぢやないかと

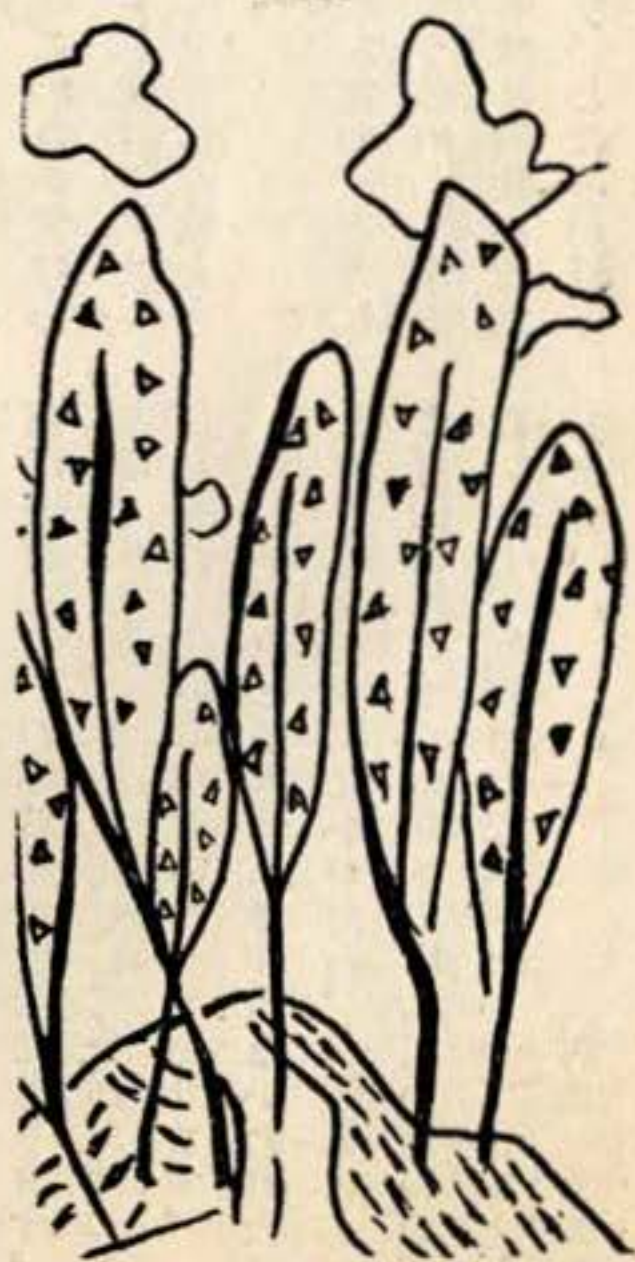
問われて和尚はすかさず

なむ大慈大悲遍じようこうこう……

なんぞと言いなおす

これは如何にもしゃだつな、ほほえましい格好のお坊さまが庄屋の婆さまに突っ込まれてあわてて御名号を遍じようこうと交えるところがおかしいのです。非常にユーモアがあつてこれも私は好きな下座の一つです。

只、前の、ほんほんの十六日に、珠数が切れて、はなおが切れてお釈迦さまを手で拝むと言うのが何故かわからないのです。つまり珠数が切れて、おまけにはなおをいじったからその手も洗わずにお釈迦さまを拝むのは勿体ない……という訳か、そんな風に私は解釈



していますが、字で書くこと理窟に合わない事でも唄ったり聞いたりしているとあまりそれは気にならないで只如何にも田園の盆のありさまが浮んで来る節なのです。

私は芝居の中のこうしたお盆風景が好きです。すから実際の田舎のお盆というものは、あまりよくは知らないけど好きなのです。

今から五十年位前、その頃には珍らしい自動車で今で、いうドライブをしようという事で誘われた事がありました。その頃はドライブなんて言いません。自動車で箱根へ遠乗りしよう……という事でした。

もともと自動車の大嫌いな私を知っていて誘うんです。相手の方々は皆その頃ひいき先

でもあり平常私を可愛がってくれる人達でもあり、それも三組の御夫婦に私に運転手、というのですから車は大した大型で今でいうオープンカーのデラックスでしょう。

嫌だ、という私をなだめすかすようにして体がゆれなければ宜いだろう……というので後へ三人腰かけて、前の席には真中に毛布を敷き座蒲団をのせてまたその上に羽根のクッションを重ねて、正面向いて私が座って行かれるようにしたのです。勿論助手台に一人運転手共八人です。今でしたら早速「ちよいと来い」という訳でしょうがのんきなものでした。

その行く先は箱根に一泊、翌日は沼津の牛臥、そこには当時、先代十五代目市村羽左エ門丈の別荘がありました。その別荘に市村さんが前から避暑に行っていたら、この約束が出来たらしく此方三組の御夫妻は皆市村さんの遊び友達という訳で、箱根からそちらへ廻り、そして今度は四組の夫婦に私が加入という訳です。

八月の十五日という暑い日でしたが、夜中の三時に東京を立ったのでとても涼しかった

のを覚えています。

お猿がちょこんと座らされたように自動車の方向に向いて座ってあちこちの景色を眺めるのはまことに安楽で、疲れる事もありませんでした。始めブウブウ言っていた私もやがて愚痴は言わなくなりました

この旅行は結局面白かったことも無類でしたが、沼津で市村さんとその愛人の方と四組と私で九人になってからハメをはずして遊びました。あまり泳ぎを知らない私がおぼれかけたなり、三組の御夫妻の中に妊娠の徴候のあったのを知らず遠乗りして、帰りには、病気になるってしまった奥さんもあったりして、いろいろの事に出遇いました。さすがに帰りは汽車にしよう、という事になって市村さんお二人が参加したので九人が一等車で、それこそ東京までさわぎずめ笑いずめで帰りました。

私はその時の記憶よりその箱根まで行く途中、あっちこちの田舎のお盆風景を偶然見られたのが本当に嬉しかったのです。

先を急ぐ旅でもなし、八人がかわるがわるトイレを必要になると、何処でも車を止めて

百姓家を借りるのですが旧盆の故かどこもかしこも何となく賑やかなのです。汚ない、せまい百姓家だと思って入るとびっくりするよな仏間があったり、又その仏壇の立派なところ、いろいろの飾りや、お供物などを見ると本当に田舎のお盆というものが先祖代々如何に大切にしているか、という事がわかります。私は自分が行きたくない時でも誰れかがトイレを借りる時はこの降りて行って百姓家を覗いたものです。また道々も子供達が着かざって皆提灯をさげてお寺へ行くのか、帰えるのか、どっちかわかりませんけれど、それこそほんほんの十六日に……の唄のようにあちこち畔道を歩いて行くのが如何にも和やかな気分でも今でも忘れられません。

子供の頃十二日の早朝草市が町の中に立ったり、いろいろのお盆の行事のあった頃を考えると近頃はなんと殺風景になったものかと私は毎年お盆の来る度に考えさせられます。そのくせ自分の家だけでも思ったままを行なえばよさそうなものの、それも暇もなし、品物もなしで思うに任せません。御先祖に申訳ない事だと思えます。

林 彦 明 大 僧 正

高 橋 良 和

(中外日報取締役)

もうこの
辺で登場し
てもらいた
いのが林彦
明大僧正で
ある。

前回に久
松鑑瑞僧正
のことを紹
介したが、

この鑑瑞僧
正が教務部
長であった
ときの知恩
院専修道場
の上首が林
大僧正であ
った。まる
で履き捨て
た草履のよ
うにあっさ

りと百万辺本山の法主を退いて後進の指導のためにこの専修道場の上首に迎えられて、晩年までここでは唯識や、因明を講ぜられたのである。こんなむつかしい仏教にチンプンカンのわたしを五年間もそのままおいてもらったのであるから、ほんとうにこの大僧正に感謝する外はない。

百万辺の法主の頃から参上してカステラの御馳走になったが、この大僧正の好物はカステラとさしみの二つにしぼられるのでめる。

自坊が沼津の海岸であるからあちらのさしみは格別であつたろうが、さかなに縁の遠い京都などのさしみなどはくさる一歩前のものであつたのに、この大僧正は文句いわずこのさしみが好きであつた。

当番をしていた頃夜ふとんを敷いてさがってくると、はじめのうちは必ず呼びよせられた。ちょっとこいである。なにごとかと居間に参上すると、ふんというものは、必ず畳のへりに添って敷くのである。斜に敷くと気分が悪いとひとこととお小言を頂戴してからカステラの御供養をうけたものであつた。

日曜日になると墨蹟揮毫である。墨はわたしのする役とあつて、二時間あまり袖をまくつてするのである。これはあまり好きなことでなかったが、あとで半紙の一枚を「これはあ

んたにあげる」といただくのがたのしみであった。

そのかわり、一寸不出来のものもあるし、墨のこぼれたのもたまにあったが、その自坊の沼津乗運寺が戦災で焼失して、この大僧正の揮毫のものが一つもないというので、先年その法嗣の林輝彦さんにおくったことがあった。

この大僧正はすこぶるきちょうめんであって、御法礼の金封はすべて水引きでくくって一切保存されるし、その上手紙、葉書の類も必ずまとめて保存されるというまことに整理の行きとどいた珍しい大僧正である。たいてい大僧正ぐらいなら常福の小僧が、わたしたちに委されるのがならわしであるのに一つ一つ御丁寧に整理されているのであるから、こと身の整頓は実に行きとどいているのである。

この大僧正は昭和十四年にわたしをつれて中国を訪問されたのである。随行は神林時処人老、それに神林礼堂、林輝彦の各氏、わたしが一ばん若かったのでさしあたりカバンもちというところである。日華事変最中の北京で、当分の北支方面軍司令部を訪問されたのである。

さいわいにもその総司令官の杉山元大将（後の元帥）がいるというので、面会が許されて、立派な応接室で向い会って名乗りをあげられたとたん

閣下、シナのことは長いサーベル（大僧正はこういわれ

た）では解決出来ませんよ、これにまかしてください。

と衣の袖をたたいて、仏教による親善による解決をものに見事にしゃべられたのにはほんとうにびっくりした。日華事変のあのときに、よくもこんな思いきったことが云えたものだと感心したら、そのときあたふたと部屋を飛び出した松井という大佐が、えらいことをいいましたね。ここでは問題にしません。が外ではいわれぬように。とわたしたちに口止めしたことをおぼえている。それほど日華仏教の交流運動に信念と自信があたりだったようである。日華事変から大東亜戦争になったときに、中国の国監総長で南京に赴任の話が出たとき、わたしについてこいということであった。然しわたしは、いくらでもまいりますが、もしもわたしがまいりまして、あちらですぐ応招がきますと御前さま（わたしたちはこう呼んでいた）に迷惑をかけますから、とこの時だけは辞退したので、女婿の高瀬孝仁氏が赴いたのである。

わたしが今の会社に入社するときもこの大僧正がわざわざ履歴書おもって真溪涙骨社主のところに行ってもらったら、涙骨社主の曰く、林さんというのはほんまに頭のするどいやなと感心したことがあった。剃刀のような大僧正であったが、わたしにとってはカステラをいただく好々爺の我が家のおじいさんの味がしてならないのである。

母性愛と仏性愛

宝田正道

(中央公論社編集・宣伝技術部長)

人のこの世に生まるるは、宿業を因とし、父母を縁とせり。父にあらざれば生れず、母にあらざれば育たず。ここをもつて、氣を父の胤に稟け、形を母の胎に托す。この因縁をもつての故に、悲母の子を念うこと世間に比いあることなく、その恩未形に及べり。

—— 仏説父母恩重經

少し長いが、今月は『仏説父母恩重經』の中の冒頭にある一節をとることにした。というのも、七、八月は、各地においてお盆の行事がいろいろと催される習俗があるが、お盆のはじまりは、仏弟子目蓮が、餓鬼道に堕ちて苦しむ亡き母の追善供養を営んだという故事（菩提心集、仏説盂蘭盆經）にならって、祖先の靈をまつり、あわせて古老を尊重、父母に孝養をすすめる意図であると解釈できるからである。

『仏説父母恩重經』は、もともと唐の時代に、『心地観經』や『仏説父母恩難報經』『仏説孝子經』などを材料にして、誰かがお

經の体裁に書きあげた一種の偽經に属するものといわれている。しかし、そこに説かれてある孝道倫理は、仏説といってもよく、わが国にも早くから伝来して、正倉院文書の中にもその名が見えているほどである。よほど日本の国民道徳にマッチしたものであるということができよう。

まことにこのお經を読んでいると、一々、思い当る節が多く、私自身、二、三十年前から受誦して、親の恩のありがたさを、その都度、この經典から教えられたものである。

一般に慈父といい、悲母といい、父の恩は山よりも高く、母の恩は海よりも深い、といわれている。また、「身体髮膚これを父母にうく、あえて毀傷せざるは孝の始めなり。身を立て道を行い、名を後世にあげ、もつて父母を顕すは孝の終りなり」という文句も、少年の頃からよく耳にきかされて来た人が、多いことと思う。

しかし「その恩未形に及べり」といわれているように、母心の尊さは殊に深い。母性愛の強さは、母鶏が雛を孵す時のやつれ、乳虎が仇を防ぐ時の猛威、それに焼野のキギス、

夜の鶴の譬喩に現われる如く、禽獸でさえ本能的にこれを備えている。まして万物の靈長たる人間においては、母は妊娠したその日から、まだ人の形を成さない胎児のうちも、その發育を案じ、長じては有名な大岡敷きの古例の如く、敷きの庭で養母と子の所有を争つて、愛児の腕をひくは身の痛みと、先に手を放すだけの愛情にみちている。

昔、一羽の鶴が、三羽の雛を育てるに際し折柄の旱天続きで食物がなく、自ら腋下の肉を裂いて子に与えたところ、子は「この肉の氣味母の身と似たり、むしろわが命を損すとも母の骸は損さじ」といって、三羽とも口を閉じ、食を断った。諸神これを見「母の慈悲喩えがたく、子の孝情希有なり」と嘆じて、直ちに旱天をやめ、母子を救った（六度集經）というが、平安の歌人赤染衛門も、わが子挙周と互いの身をかはいあう美談を残している（古今著聞集八）。

とにかく「わが身をもってわが子の死に代らんと欲するは父母の心なり」（二宮先生語錄二）で、その間一毫も利害得失の念を挿む余地がないのが、母親の献身的愛情である。

七人の子らがさきくば父母はうもれ果つとも悔なく思ほゆ
伊藤左千夫

という愛情があつてこそ、「井戸のぞく子にありだけの母の声」も出るのである。

今時分、こんな話をもち出しても、現代っ子は、「教育勅語」じゃあるまいし、そんなお説教は沢山というかもしれない。また、自分らが勝手に生んだくせに、恩着せがましくいわれるのは迷惑だなどと考える者もある。ひどいものになると、親の叱言が気に入らないといつて自分勝手な行動をし、はては尊属殺しの大罪まで犯す若者まで現われる。

父は擲ち母は撫するを子心に

違ふ心と子や思ふらん

という道歌があるが、大恩ある親に向つて、現代っ子は完全に横向き後向きの姿勢で対する向きが多い。教育の不徹底とはいへ、嘆かわしいことである。「さればとて、石にふとも着せられず」風樹の歎をかこつ人々も少くない。親の生きている内でないと、孝行の満足感も味わえないことを、『父母恩重經』を通じて自覚させることも仏者の務めである。ただ、しかし、父母、子を思う心は、とか

く自分らが腹を痛め、懷ろを寒くして育てた肉親のわが子に対してのみの愛情に傾きがちで、他人の子に対しては、案外冷たく当るのも人情の常である。仏教では、經に「我汝等諸天人民を哀愍すること父母の子を懷うよりも甚し」といい、また「三界は是れわが有なり。その中の衆生は悉く皆わが子なり」と説いて、仏の広く深い包容力のある大慈悲を教える。一切衆生悉有仏性と草木国土悉皆成仏という思想は、世の母性愛とはスケールの違った、平等一子の大無我愛である。鎌倉時代の華嚴の学匠梶尾の明恵上人は、だから幼時両親に先立たれて、悲しみの余り、犬や鳥も父母の生れ替りかと畏れ、戯れに笑うことさえ慎んで『梵網菩薩戒經』や『大般涅槃經』の教え、つまり、一切衆生のために父母となつて慈愛を施すことがすなわち衆生の仏性であることを、実践した。無窮の母性愛はわが子に限られるから無限ではないが、仏性愛は無窮且つ無限である。母性愛は仏性愛にまで高められることと理想である。せめて「母の日」「父の日」だけでも、この理想をふまえて過したいものである。

地方選挙に破れた創価学会

今回の参院選は、或る意味では「宗教戦争」

だとも言われた。創価学会が全国区九人、地方区五人を押し立て、臨んだのに対して、その他の新興宗教や既成宗教の諸団体が、創価学会に負けてたまるものかと、対立候補を立て、激しくあらそったからであった。そして、そのどちらも、宗教団体に押された候補達は、断然たる強みを見せ、堂々と当選し

た。その様相は、まさに宗教戦争にも等しいものがあつた。

結果的には、創価学会は、全国区九人全員当選という快挙を為し遂げ、一躍、参院内における第三勢力へとの上った。その総得票数は、五、〇九七、六七七という数字で、前回の参院選に比して百万近い延びを示した。五百四十万世帯を呼号する彼等の実力を、いかに発揮したと言えそうである。

しかし、この得票数も、仔細に調べてみると、五百四十万世帯もあり、一世帯一人の有権者があるとしても、五百四十万票ある筈が四十万票少ないのは不思議である。はっきりと、おまんたらを出した数だけの信者が、そのまま、学会に残っていない事を示している。況してや、一世帯、三人平均と数えている彼等の数字からすると、大分少ないのではないか。しかし、とも角、こうした組織票を駆使する事は、大したものである。

これに対し、自由党、民社党等に属する者を挨拶して当選せしめたというものの、既成宗教なり、その他の新興諸宗教の組織力、団結力は、まだまだ弱いといわねばならない。

特に仏教界において、どれ程、創価学会に対立する意識をもつて、今度の選挙に臨んだであらうか。その点、未だ未だ考え方が甘いと共に、彼等の進出が、日本の将来や、仏教界の将来に対してどれ程危険なものであるかという認識が弱いことを指摘せねばなるまい。

一方、学会側としても、今日の選挙に対し全面的に勝利を得たわけではない。それは、周知の通り、全国区では全員当選したとはいふものの、地方区においては、完全に敗北したからである。五人立て、全員当選をねらっていた学会が、二人の当選に止まった事は、何としても冷水をかけられた程ショックであつたに違いない。それまで、池田会長も、学会幹部も、すべて。

「必ず全員当選をさせよう」

と叫びつづけ、あらゆる組織と宣伝力をあげて、この選挙に取り組んで来た結果がこれであつた事を見れば、その打撃は、ただごとではない。池田会長も、

「もっと推薦したいが、落ちる人がいると気の毒だから、そうした事のない様に推薦した」

とまで言っているのである。言わば、当選確実な人だけを選んだわけである。それが落ちたのであるから、まさに「おまんだら」の御利益も、地に落ちたに等しいわけである。

落ちた渡部城克（兵庫）石田幸四郎（愛知）大橋敏雄（福岡）らは、いずれも池田会長の側近として、一騎当千の人々ばかりである。そして、この三地区は、学会が自信を持つ金城湯地である。此処だけは自信を持っていた筈であるが、いずれも次点で落ちた。その落胆は、充分寧せられる。

勿論、聖教新聞などでは、オクビにもそんな事は、出していない。強がり一方である。

「善戦して落ちたのだから、悔はない」と、ごまかしている。全員当選を呼号している彼等にとっては、全く言う言葉も無いといった所である。

さらに、彼等にとっては、これが来るべき衆議院選の試金石であっただけに、大きな打撃である。已に三十名もの推薦までしている今日、是が非でも決戦せねばならぬわけであるが、地方区でこの状態となると、更に小選挙区である衆議院選での勝ち目は、益々困難

となってくる。ここで惨敗を喫するときは、創価学会の威信も地に落ちることとなる。こうしたあせりが、今日の都議選への躍気な努力となっていると見られる。二十三人以上出さないのも、これ以上出せぬからである。勿論、都議選では、自信を持っているだけに相等の進出をするとは考えられるが、衆院選はそうはいくまい。

尚、今日選挙では、一方では信教の自由を叫びながら、一方では邪宗論をぶつという矛盾を曝露した。こうした矛盾と、衣の下にかくされた鱧の化の皮は、必ずはがされる日の来ることは確かである。已に、滝田全織同盟会長は。

「公明党は創価学会のみ正しいとし、他の宗教はすべて排撃している。これは憲法に保障された信教の自由を否定し、全体主義に通じる危険がある。」（朝日、七月十一日号）

として、公明党と対決する意志を表明した。今頃、こんな事を言っているのは遅いのであるが、創価学会もいつしかその実体があばかれて、地に落ちることを、悟すべきであろう。

『浄土』発刊三十周年に際して

浄土も発刊以来幾多の変遷を見ましたが、本年遂に三十周年を迎えるに至りました。そこでこの記念すべき年に購読下さる皆様、御寄稿下さる皆様と共にその喜びを分かちあいたく思い、記念事業をいくつか計画中です。今までのところ、浄土同人のトラクトの作成・浄土特集号の発刊・記念講演会の開催を行うべく準備しております。トラクトの作成は佐藤密雄・佐藤良智・竹中信常・中村康隆・安居香山諸氏に依頼中です。又特集号には浄土にゆかりある諸先達の思い出や、これからの浄土のあり方等々。講演会は十一月に東京・京都で行なうつもりであります。すでに各方面から御祝・激励等をたまわり編集部一同感激しつつ、この記念の諸事業の成功を確信して、その準備におわれています。御期待下さい。

編集部

みよこの土の浄

—八月—

雄俊橋大

戦乱の悪夢がぬぐい去り、平和な世がおとづれてから、早や二十年になる。ベトナムでの血なまぐさい戦いの話を耳にするたびに、一日も早く戦火のおさまることを祈らずには

おられない。六日は原爆記念日。昭和二十年の八月六日、広島に落ちた原子爆弾は戦いを終らせるに充分な原動力となり、九日には長崎にも落下した。そして十五日に終戦となった、此の日が終戦記念日。

十三日から孟蘭

盆会。十三日の夜門口でオガラを焚

いて精霊を迎え、家の中にひき入れ、精霊はなつかしの我が家に帰ってくる。そして十六日の朝、精霊は送り火におくられて、又浄土にと帰ってゆくが、この日の夜お供物は麦藁

でつくられた舟にのせて川に流される。夜ともなれば、盆踊りの声があちこちから聞えてくるというような、盆風景は各地それぞれに特色をもってみられる。京都の盆の行事は、六道まいりにはじまり、大文字の送り火でおわりをつけるという。六道とは冥途^{めいず}へかよう道のことであつて、珍皇寺は六道の入口にあたり、昔小野^{たかし}筆はここから地獄に行き、又娑婆にかえつて来たと伝えられているところから、孟蘭盆の精霊をお迎えするため、珍皇寺にお参りするというならわしが生れた。六道まいりは八日から十日までのことである。

孟蘭盆というのは、梵語のウランバーナの音写で、「さかさまに吊り下げられる苦しみ」という意味で、このような苦しみをうけている人たちを救うために、法会を修するのである。

釈尊の十大弟子の一人目蓮は、神通第一といわれた。神通力では、特に目蓮がすぐれた能力をもっていた。その目蓮が天眼通をもつて、亡くなった父母をみると、母は死して餓鬼道におち痛苦をうけている。驚いて飯を供したけれども、飯は火焰に変じて食べること

もできない。目蓮は泣きかなしみ、釈尊にどうしたらよいものかと訴えたところ、釈尊は「汝の孝順の至誠も、母の重罪を救いがたし。すべからく十方衆僧、威神の力によって、解脱せしむべし」といって、七月十五日自恣の日、百味の飯食を衆僧に供養すれば、七世の父母および現在の父母の危難にあるものを救うことができる、ねんごろに教えられた。

目蓮は早速教えられた通りの行法で、母の苦しみを救うことができ、そのため数多く苦しめる人たちを救わんとする未来世一切の孝順の志ある者に、この法を残そうとされた。これが所謂お盆の起源であつて、中国では梁の武帝が大同四年（五三八）に修した記録があるけれども、これが嚆矢というわけではなく、日本では推古天皇十四年（六〇六）大和の元興寺で行ったのが初めらしい。

この頃、町や村のあちこちで盆踊りがおこなわれる。今では、お盆のころおこなっているから、盆踊りというのだろうと思われているが、勿論宗教的意義を失った今では、そう解しても差支えないが、元来は孟蘭盆におとづれる精霊をなぐさめ、又送るために老若男

女が相い集って踊り、「また来てね」と懇願する人情のあらわれが、盆踊りとなったものらしい。そして十六日は大文字。如意ヶ嶽の大文字ばかりではない、金閣寺山には左大文字、西賀茂山には船形、松ヶ崎山には妙法、愛宕水尾山には鳥居形が点火されて、それらの火が互に相い映じ、京ならではあじわえぬ夏の宵にふさわしい情趣をただよわせる。

かたみ子や母が来るとて手をたたく 一茶

聖霊と紛れ遊ぶや盆三日

吾仲

大文字に片煩まばゆき往来哉

子規

二十二日が六斎念仏、そして翌二十三日は一遍上人忌。京都の空也堂では二十二日から三日間にわたって、毎日夕方から本堂で念仏踊りがある。昔は八日・十四日・十五日・二十れ日・三十日の六斎日に行なわれていたので、六斎念仏と呼ばれていた。鬼神が勢力を得て人命をうばう下吉の日が、月に六日ありこの日には功德を修して廻向し、悪鬼の悪心を遠ざけて善心をおこすべく、精進する日として定められたのが六斎日である。この六斎

日に修した念仏なるが故に、六斎念仏といったのである。空也上人絵詞伝によれば、空也は松尾明神に参詣したとき、鉦を胸にかけて念仏踊りをしたといわれ、空也の先蹤をついだ一遍智真も踊躍念仏をおこない、この人は



大文字の送り火

更に遊行とお礼くばり（賦算）という特異な宗風を形成して、時宗を開立した。空也とい、一遍といっても浄土宗の人ではないが、念仏を一般の人たちの間に浸透さおた功績は大きい。一所に住することなしに、各地に遊

行して、阿弥陀仏のお徳をたたえ、念仏の功德を説いて、庶民の間にひろめて歩いた。しかもそれは、多く市場とか神社とかいう、当時としては最も多く人々の集まるところをえらび、とびこんでいったの勧化であって、積極性をもっと共に、念仏に踊りを加味したところに新鮮さがみられた。

この月の四日には大玄大僧正がなくなっている。江戸時代増上寺に学寮があった頃、二大学寮として栄えていたのは竹叢軒と一円室であつた。一円室は増上寺四十七世敏誓弁秀の法脈をくむ門流であり、竹叢軒は四十五世成誓大玄の法流であつて、大玄は、当時伝戒がすたれ、二祖三代の祖書を軽んずる風のあるのをなげき、陸奥から無能上人を招いて円戒の復旧と興隆につとめると共に、自から日課万声の念仏をとなえた学僧で、江戸末期以後檀林にのほるものは、この法系から出た人が多かったという。

八月も末ともなれば、夏の日ざしはやわらぎ、やがて九月をむかえ、一日は震災記念日である。

ベトナムを救え

渋谷 賢 応

茅野市仏教会会長

今年の八月二十八日、二十九日と二日間、仏都長野市に於て、第十三回全日仏の大会がもたれたることとなり、地元長野県としても今受け入れ対策に懸命の努力を重ねている昨今である。

去る七月四日、松本市外浅間にて、長野県仏教青年会の役員会がもたれ、全日仏大会の青年部会に提案する大会議案について検討が行なわれた。

各支部より内外の諸問題が出されてその決定にはがくがくの論がなされたのであるが、この際、脚下照顧的な内的問題よりも、外的な問題として「仏教精神に立脚した平和を掲げて、ベトナムの同胞を救う運動を起そう」と言う議案に絞ることに決定した。

実は今より四年前、昭和三十七年六月一日と二日、大阪に

第十回大会が開催せられた際、府県仏教会の一員として出席させて頂いたのであるが、当時は安保斗争もどうやら終り、そのうっ憤が原水爆禁止運動にすりかえられて来た時であって、国民運動にまで発展した盛り上がり、いかに党略に利用するかと言う動きのきざしが見えはじゆた折であつたので、

全日仏としても、平和運動への介入を極力さけていたようであつたが、第二日、会場四天王寺会館の入り口には鉢巻きをした青年諸君が二派に分れて入場者に盛んにパンフレットを配っていたのである。果せるかな総会の席上、たまたま仏教鑽仰会の中山理々先生の提案である「印度の救難運動に協力しよう」と言う議案を契機に、国会まがいのこうこうなる野次の応酬がはじまったのである。

もうそこには仏教徒会議の姿はなく、平和論一変して斗争の場と化してしまつたのである。それに対して、全日仏当局は、なんらの定見をもっていなかった。実はこの問題が出ればこうなることを予期して、避けて避けて来た事態が勃発したのであるから狼狽するの無理からぬことであつた。

戦後日本の姿として、どうしようもないことながら、何ご

とによらず近頃は、ことばをことば通りに、一応ことばのもつ純粹の語義から解釈できなくなってしまうように思われてならない。掲げられたことばは結構であるが、その裏には何らかの党のヒモがあるのでないかと疑って聞くのが常識のようになってしまった。「平和」とだれかが一口言っただけで、もう右か左かの臭いがわかるのである。特に政治においてはなお更この疑いを深くする。党名の上に不の字をつけて丁度ふさわしい感じが湧くほどの思いである。

長野仏青のこの「ベトナムを救えの提案も、もうこのことばを見ただけで右か左かの臭をただよわせて受け取られるのではないかと思う。しかしそうではなく、仏教精神の立場に立って、同じ仏徒として、あの同胞相食む修羅場を、黙視するにはしのびないではないかと言うのである。

「それはわかる。しかし一たび運動と名がつけば具体的でなければならぬ。具体性のない運動は空論にすぎない。具体性とは政策である。政策である以上、二者択一の姿勢が明確でなければならぬ。齒の浮いた理論は空論にすぎぬ。」

「それはいいとして、一体どう言うことをしようとするのか。今の日本の仏教にそんな大それた資格と力があると言うか」

「左か右かも判然しないベトナム論議など論議ですらあり

得ないではないか。」

等々の批判は覚悟している。現に右にしる左にしる旗色を鮮明にして会に参加せられる人も多いと聞く。再び大阪大会の愚をくりかえすのではないかとの危惧も大いに感じてゐる。それにもかかわらずこの問題を提案したのである。あえて全日仏とは言わない。日本の仏教徒はこのような問題に對してあくまで前向きの姿勢でありたいのである。純粹の理念の上に立って主体的に進みたいのである。

勝てばうらみを受くるべし

負くれば心安からじ

勝ちと負けとを捨てる身の

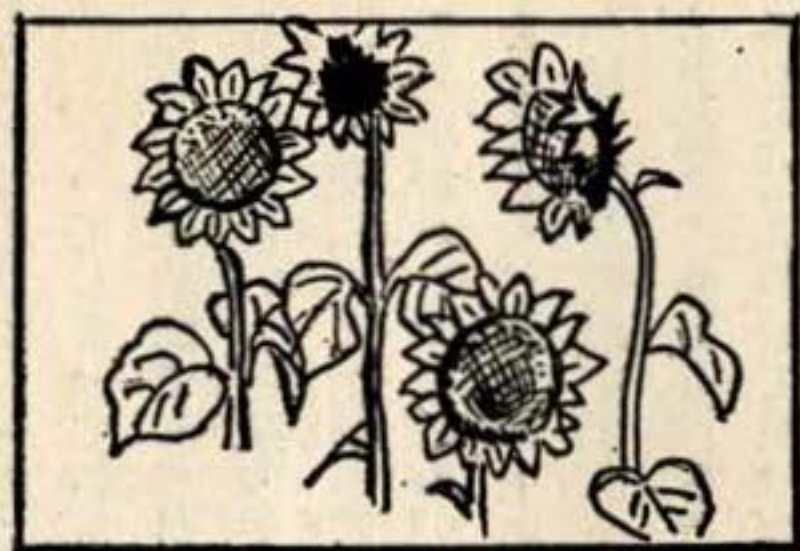
夜半の眠りぞまどかなる

これは今、右し左ししている人々にとって、あまりに理想にすぎるだろう。それはむしろ幼稚と思われる程に。だからこそ仏教それ自体も右し左ししていて主体性を欠くのである。

これが我慢できないのである。何んともやりきれなく腹立たしいのである。どうしても仏教それ自体の、独自の毅然たる理念と態度とをうち立てたいのである。どうか浄土誌友のみ

なさま方も、一人でも多くこの機会に仏都信州信濃の善光寺をおたずねいただき、仏青の集いにご参加願ひ、眞の仏教活動のあるべき方向をお示し願ひたいと思うのである。

家康と三河一揆



鶴田湛泉

二 一揆の発端

一揆勃発の原因は全く些細なことからであった。

西三河を統一した家康が今川氏の勢力を除いて東進政策を実行するには先ず三河周辺の城砦の充実を計らねばならなかったし、そのためには従来の数倍にもほる軍備と兵糧とが必要であった。

九月の初め佐崎に砦を築いたので、兵糧を貯えて置く必要に迫まられていた。そのため酒井雅楽助正親の指揮のもとに、秋の刈入れ時を待って菅沼藤十郎定顕を所々に遣して兵糧を集めさせていた。

その時、たまたま佐崎村の大寺上宮寺の境内に

新穀を数十枚の筵に乾していることを知った菅沼は、家臣に軽卒をつけ上宮寺に遣わし

「このところ糶米乏しき故、この寺の糶を借用いたしたい。追って返済いたしますから」

と寺僧に申し込んだが、一粒でもほしい端境期であつたためか、諸否の返答をきかないうちに、軽卒等が糶を吠につめ込みまた、その間に佐崎の砦に運び去ってしまった。

所々の城砦の充実のために糧秣の確保が当然必要だったので、農民から糧秣の徴収が強力に行われていたばかりではなく、寺院にもこれを適用していたのであった。

ところが、これがはしくも上宮寺の憤激を買うこととなった。

糶を奪われてしまったことを憤慨した上宮寺の寺僧等は、このまま捨てて置かれぬ重大問題とばかり、三河の大寺、針崎の勝鬘寺、野寺の本証寺、土呂の善秀寺の僧等呼び集めて対策を凝議するに至った。

三河には浄土宗、禪宗、日蓮宗もあり、真宗には専修寺派もあつたが、この頃、本願寺法主の威力は遠く加越能一帯、伊勢長崎にも及んでいたが、三河に於ても花々しく発展し

門徒の勢力は隆勢であつた。

碧海郡佐崎の上宮寺、同じく野寺の本証寺額田郡針崎の勝靈寺は三河の三ヶ寺と称せられ有力な本願寺末寺であり、これに中郷の淨妙寺、本郷の正法寺、平坂の無量寿寺、長瀬の願正寺を加えて七ヶ寺の大寺と数えられていた。更に土呂に本宗寺、御寺に善秀寺もあつて三河平野の農民の間に教を滲透させ、多くの末寺道場を設けて教団組織がガッチリ築かれていた。信徒も農民ばかりではなく、松平家の家臣を始め諸豪族の家臣武士も少くはなかつた。

当時、上宮寺には西三河を中心に六十四の末寺道場があり、其の他尾張には四十一ヶ寺あると云われ、本証寺の末寺道場は三河では上宮寺以上といわれ、勝靈寺は七十ヶ寺と数えられていた。

この三ヶの大寺を中心に其の他の有力寺院その下に属している末道場、又有力門徒を中心として更にその数十、数百倍の門徒が講によつて結合され組織されていたのであるから三河の一向宗の教団の力は強大なものであつた。

三河地方に一向宗が盛んであつたのは、親鸞が約二十年間にわたる関東の生活を終え高弟の真仏、専信房等主従四人で帰る途中、建長八年十月、矢作の柳堂に於て一七日の間法談した時、聴聞していた貴賤男女が帰依して皆この宗門に入つたがため、その後文明の頃ますます盛んになつて永祿の初め頃には龐大なる門徒組織が出来上つていたのであつた。

上宮寺、本証寺、勝靈寺はこの地方の僧祿で、更に創建以来守護不入の寺院として、租税公役を免ぜられていたのみならず、無頼の徒といえどもここへ隠れた場合、これを引き渡すことを拒み得るといふ特権を与えられていた。こうした慣例を無視した菅沼の行為は前代未聞の狼藉と憤懣し、これをそのまま黙つて捨て置くべきではない。我が宗門に加えられた恥辱を雪ぐためにも、今後の戒めのためにも、菅沼の糺弾を異口同音に唱えるに至つた。

法城を守るが仏徒の使命と、理なきに理を立て

「断呼、仏敵を膺徴せよ！」

と衆議一決すると、使者が八方に飛んだ。

宗門に深く帰依していた僧俗は、「一宗の興亡この時にあり」、とばかり忽ちに参百余人上宮寺に馳せ集つた。

いつの時代にも群衆心理ほどおそろしいものはない。

「仏敵、菅沼をやつつけろ！」

と口々に叫んで、棒、鎌、竹槍などを手に手に提げて菅沼の屋敷に押しよせると、ワツと鬨の声をあげ門を蹴破つて崩雪れ入つた。

あいにく菅沼は岡崎城にあつたが、留守居の若党等はこの急襲に驚き狼狽しながらも、太刀を抜いて防ぎ戦つた。女子供は泣き叫んで逃げまどつたのはいうまでもない。

若党等は奮戦したが遺憾ながら相手は多勢のこととてまたたく間に取り囲まれ、太刀は棒や竹槍で叩き落され、ところかまわずなぐりつけられ、果ては半死半生の目にあわされてしまった。

暴徒と化した土民は戸障子を叩き壊すと、米麦雑穀は勿論のこと、家財道具まで片っ端から奪い取つて、高らかに凱歌をあげて上宮寺へ運び去つた。

岡崎にあった菅沼は、馬を飛ばして馳せつけた家臣によって我が家が狼藉に遭ったことを知ると、驚き且つ怒って、直ちに酒井正親に事の次第を訴えた。

正親も事情をきいていたく憤慨したが、幸い彼は先祖代々上宮寺の有力な門徒であったので、僧徒の反省を促すためにもと、直ちに僧徒の行為の不当を挙げて手簡に認めると、上宮寺へ詰問の使をやり更にこういわしめた。

「菅沼が守護不入の地とも知らないで米を借用したのは、無礼の罪はないとも云われないう。しかし僧徒はすべて忍辱を己の行とするものであるから、若し不満があるならば先ず岡崎城へ訴え出で公教を仰ぐのが至当である。それにもかかわらず理不尽にも多勢を催して菅沼の屋敷に侵入したる上、家屋を打ちこぼち女小児まで打擲したるのみか、家財まで奪って寺へ持ち帰るなどとは言語道断、その罪もつとも大と云うべきである。深謝のこゝとばあるならば速に反答されよ。返答次第によつては、是非の沙汰に及ぶであらう」

と強硬な態度で厳談した。

上宮寺の住持信祐、その弟子性祐、家司の

三浦四郎右エ門を初め集っていた三ヶ寺の僧等は、正親から非を詰られた書状を一覧すると憤激したが、更に、使者の口上をきくに至つてますます激昂し返答に及ばず、

「早く消えうせろ、ぐづくぐずすると叩き斬つてしまふぞ」

と、使者をおどかし追い帰してしまつた。

事態は、そのままではおさまらなかつた。

日と共に三ヶ寺だけの問題だけに止まらなくなつて行つた。

三ヶ寺は強固な本末干系の紐で統制されてゐる強力な支配力に物を云わせて、末寺道場に呼びかけ、更に門徒に呼びかけた。

三ヶ寺から呼びかけられた門徒僧俗は、我が宗門の危機とばかり、道を遠しとせず各地から続々と馳せ集つて来た。

家康の家中の大半は一向宗の門徒であつた。根が正直一途な三河武士のこと故、信仰の上にも純真であつた。彼等は誘いをかけられると、前夜まで岡崎城に勤番として詰めていた者も、門徒なるが故に今日は自己の属する寺院に馳せ参じて行つた。而も日と共に次第に数を増し、残り留まつている者の中にも、

三ヶ寺へ走り去る者も統出するおそれが多分にあつた。

こうして、將に一揆が勃発しようとする一触即発の危機に立ち至つた。

一揆の勢力が増してくると、いつ何時收拾もつかない動乱となつてしまふかも知れなかつた。

こんな陰惡な事態に、家康の心中は暫くもやすむひまもなかつたのは勿論である。

思えば、幼君の留守には一糸みだれず苦難に耐え忍んで、所領を守りつづけて来た忠烈にこり固つていた家臣だったのに、何としたことか。

今国内に事を起すことは、一步前進しなければならぬ家康としては不利である。

意地で弾圧してはならぬ。家臣を切るのは我が手足を切るのも同然である。腹が立つが辛棒しなければならぬ。その上、一揆に与する者といつても名の知れ渡つた譜代旧功の家臣も多いこととて、実力で弾圧しないで、どう納得さすべきか肝胆を碎いた結果、あくまで慎重な態度をとり未だ和平の交渉の余地があると思ひ、岡崎の一向宗の専福寺の住持祐

歎と、彼の甥の渡村の善秀を招いて、

「この度、一揆を起そうとする一向宗徒の振舞は無道の至りであるが、彼徒に一味してゐる我が家臣も多いこと故、討手向けのもの心もとないこと。和尚たち、事を鎮めるよう取り扱られよ」

と和平の交渉に当らしめた。

祐歎等は早速上宮寺に赴いて、家司の三浦に逢うと、一揆を未然に防ぐため集めた門徒を即時に解散せしめるよう言葉をつくして説得につとめたが、彼等の言葉を冷静に考えられないほど早や感情の渦の中に巻きこまれていたのか、頑としてこの和平の交渉に耳をかそうともせなかった。

やむなく二人は、それより御堂の善秀寺に赴いて和議の斡旋をしようとしたが、彼等もきき入れないのみか、

「今度の事については、仏祖如来へ恩徳報謝のためであるから、この企には門徒の檀那は云うまでもなく、他宗の人々さえ同意味方する者が多いのかかわらず、同じ教を汲む身分でありながらいらざる事を取持って、とやかく沙汰するとは仏徒の法に背いている」

と、却って二人の非を鳴らし初め、果ては

「以後のこらしめのため、きやつら二人の首を引き抜いて軍門の血祭にせよ」

とひきしめ騒ぐに至った。

仏門に入った者同志なので、この仲介に一縷の望みを托していたが、すべて徒勞に終ってしまった。

僧徒の險惡な雲行きに胆を消した祐歎等はほうほうの態でその場を逃げ去ってしまった。追手が二人を首にせんものと、尚も執拗に追跡して来たので、とうとう大阪まで難をさけてしまった。

家康は酒井正親に命じて、更に嚴重に糺明するであろう。いや一揆に与した門徒は誅罰されるであろう。こんな噂がしきりに立つに至って、ますます激昂した三ヶ寺の僧等は、松平の家臣も多く味方に引き入れた事として、我が家臣さえ押え得ない実力なき若き城主とあなどってか。一宗門破滅の時来る。我が方より一揆を起して仏敵を退治すべきである。身命をかえ見ず、法敵家康をほふれ！と檄文を四方に飛ばして、更に門徒を招集し出したのであった。

新会員紹介

島県豊田郡大崎町	西光寺	児玉	靈信
滋賀県蒲生郡蒲生町		高畑	浩三
三重県津市中之番町		中川	志な
東京都大田区田園調布		原	とき子
神奈川県藤沢市鶴沼		川瀬	得円
愛知県宝飯郡御津町	大正寺	小符原	鶴瑞
東京都世田谷区北沢		小池	ふさ子
神奈川県秦野市鶴巻	西光寺	一	真順

業界一の銅瓦葺専門店 広告の責任重し

何代も研究せる卓越せる技術は他所の出来ざる価値ある技量と優美頑強安価を誇る赫々たる定評ある当方へ。建設者諸負業者も他所の倍以上保つと他の広告に迷わず遠方でも是非とも設計相談乞無料

東京都文京区春日一丁目九の二八

銅瓦葺協会

相談役顧問

設計及監督

石 黒 工 業

電 (八一二) 一五五一

人間味豊かな良忠の生活

鈴木 成 元

（大正大学講師）

浄土宗教団成立の上で忘れてならないのは良忠の活躍であ

る。数多く分れて活動した各派の中で、鎮西流の正統性を主張し、三代確立の基礎をきき上げたのは良忠である。しかし良忠時代にはまだ三代の確立までには至らなかった。良忠の入寂後、六派に分かれた各派が互いに正統性を主張するようになった、はじめてそれは決定的なものとなるのである。

その各派に分かれる原因にも種々あるであろうが、その中最大の原因は良忠の人間味にあったと私は信じている。つまり

良忠は、数多くの弟子に附法状である『授手印』を授けているが、後継者は最年少者である実子の良曉に決めたことが諸弟子の感情的な対立となったのであろうと思っている。しかし、このことがやがては教団発展の上に大きな貢献をすることになるのである。そこにわれわれは歴史的な価値を認めな

ければならない。

良忠には妻も子供もあった。しかしこの説は従来全く否定されてきた。だから良忠の伝記はいうまでもなく、良曉の別伝にも全くみえない。まして後世つくられた浄土宗関係の多くの伝記や系譜類にはもちろんでていない。いや現在でも良忠に妻や子があったという不思議に思う人が多いし、そんなことはないと否定する人がかなり多い。しかし事實は事實である。

正中二年（二三三）三月十五日に書いた良曉の「述聞副文」によると、良曉は文永六年（二五九）、十八歳の秋比叡山に登り、東塔南谷極楽房の仙曉の室に入って翌年出家受戒した。ところが文永八年になると、修行中の良曉のところへ良忠から使いがあった。そこで良曉は還山することを仙曉に約束し

て鎌倉に下った。その目的はあくまでも良忠に会うためで、良曉には浄土宗学を学ぶ意志はなかった。

上総・下総の教化を終えて、鎌倉佐介谷に住んでいた良忠は、その疲労のためか、文永八年のころから大病を患った。

そこで当時七十四歳の良忠は、比叡山で修行中の実子の良曉を鎌倉に呼んで、自分の住んでいる悟真寺の房地と武州鳩井の免田とを譲るのである。譲状のはじめに「お前とおれとは

あろう。良曉の鎌倉下向も父の最期を見護るためであったことはいうまでもない。そして遺言状ともみられる譲状までもらうのである。良忠が入寂するのはこれより十五年後の弘安十年（二六七）であるが、余程の大病であったのであろう。八十歳で入寂する法然も六十六歳の建久九年に大病を患い、信空に遺言状の没後制誡を与えているのである。

それはそれとして、余命がないと悟った良忠にとって一番の心配は実子の良曉であつたろう。そこで自分の死後、残された良曉の生活の安定を計るために、財産の全てを譲っているのである。数多い良忠の弟子の中で、良忠から財産を譲られたものは良曉ただ一人である。良忠の手となり足となって活躍していた性心は勿論のこと、良曉よりも早く附法状をもらった多くの弟子達は、だれ一人として財産はもらっていない。これは注意しなければならない。

親子である」といっているように、良忠と良曉は親子であるからにほかならないし、親であればまた子供が可愛いに相違ない。まして七十四歳の老齢で、しかも大病を患い、余命のないことを悟った良忠は一目だけでもわが子に会いたかったであらう。そのため良曉を呼んだので

次の心配は尼定阿と他の子供達のことであつた。そこで譲状の中に「自分（良忠）が生きているときのように、尼定阿を母とし、舎弟等を子供と思つて孝行をつくせ」といっているのである。つまり文永九年ごろ、尼定阿は良忠と一緒に生活をしていた妻ではあるが、良曉の実母ではなかったらしい。良曉の母は誰であつたかはわからないが、定阿は良曉にとって義母にあたるわけである。そして良忠にしてみれば、良曉



鎌倉光明寺三門

ほどではないにしても定阿が可愛かったに相違ない。そこで自分の死後いざこざがあつては困るという良忠の考えから、自分の生きているときのように定阿を母として孝行をしろといっているのである。それにしても、舎弟というのは、単に良忠の弟子ではなく、良曉の弟達を指すのであろう。つまり良曉以外の良忠の子供を指すのであろう。しかしこの弟というのは良曉と同腹のものかどうかは疑問である。わざわざ良忠がこのようにことわっているところから考えると、良曉とは異腹の弟達なのではなからうか。つまりその弟達というのは、良忠と定阿との間にできたもので、良忠と一緒に生活をしていたのかもしれない。

『鎮流祖伝』や『浄土伝灯総系譜』は後世作られたものであり、疑問点が多いものであるが、この中では良曉を良忠の家弟としている。山子ということなら問題はない。けれども従来いうように、良曉は良忠の弟であると解したら間違いであろう。良忠と良曉とは五十四歳も異なるのであり、常識からすれば、兄弟とはどうしても考えられない。またこれらの本にある建長七年の生れも文永九年の登山も間違いで、実は建長四年に生れ、文永六年十八歳で登山したのである。それにしても良曉は何処で生れたのか、母が誰であつたかは明らかでない。

宝治二年（三三六）良忠は京都にいる尼浄意の招請によって『選択集』を講じたことがある。道光の『然阿上人伝』によれば、浄意は聖覚の妹であるという。そして浄意は良忠の説が聖覚の説と全く同じなので良忠を重んじ、諸檀施主を募つて、良忠が洛中に住んで浄土教の布教をすることを請うたという。そこで良忠も長野善光寺に参詣するまでの数年洛中にとどまったようである。しかし良忠と浄意との関係がどんなであつたかは明らかでない。良忠の愛弟子で、しかも京都に住んでいた道光が記したものであるから、かなり密接であつたと推察される。しかし良曉が浄意との子供であつたかどうかは論外である。何にしても、良忠の行動を考えると、彼は親鸞と同じ時代に妻帯し、しかも数人の子供があつて、人並みに、いやそれ以上に、妻や子供を可愛がっていたことがわかる。

それはともかく、文永九年正月十六日に良曉を呼んで遺言状を書いた良忠であつたが、その後病氣は快方に向つた。そこで良曉は還山のことを良忠に願ひ出た。ところが良忠は、自分の老衰したことを後継者のいないことを理由に良曉の還山を許可しなかつた。そればかりではなく、良忠は今まで自分が相伝した浄土の法門を学ぶことを良曉に強請し、文永八年から建治二年（三三六）の七カ年間みっしりとしこんだ。こ

のような行動をみてもわかるように、親子であるから強請で
きることであって、他人であればとうていできないことであ
ろう。それにしても、一目良暁にあった良忠は、このときす
でに、良暁を自分の後継者と決めていたに相違ない。そのた
めに還山を

譲与

悟真寺房地并同家分武蔵井

信宗末忠

石人わ父子と回承の譲与了作

廿日先者奉力 教武所前判定

要所住生此示成寺公完休世進

茶之清思而令寄進終之与今追、旬

月假身心進修、は皆終致進、

能任令、河傳中、旦但是若、計、

且依是、遠、減、下、政、備、任、釋、所、

行、若、是、然、者、必、然、可、見、初、時、以、元、定、所、

初、心、令、了、了、不、思、量、若、可、去、心、心、

病、中、石、人、可、保、心、意、快、如、作、

文永九年四月十六日 寺持

良忠授与の譲状（光明寺所蔵上書）

中止させ、
學問を強要
したのであ
る。良暁も
よくそれに
答えて頑張
ったようで
ある。そし
て良暁は良
忠ばかりで
なく、檀那
の上野介時
遠にも可愛
いがられた
ようである
だから礼阿

などの要請によって建治二年良忠が上洛するとき、良暁を一
緒に連れて行こうとしたら、時遠の諫止によって良暁は悟真
寺に止まるのである。すなわち、建治二年ごろにおいては、
檀那である時遠も、良暁を良忠の後継者と認めていたことが
わかる。

在京十一年の長い旅を終えた良忠は、弘安九年（二二六）の
秋、再び鎌倉に下向した。そして入寂する翌年の六月までの
間に、代々相伝した『阿弥陀經』や九条の袈裟・松影の硯を
はじめ、「浄土布薩戒」「伝通記」「釈論」など、全てを文
書にし、正式に良暁に授与したのである。ここにおいて良暁
は、他の兄弟子達には授与されなかった多くの附法を受け、
後継者となったわけである。その自信が以後の活動に大きく
作用するのである。

従来浄土宗で伝えられてきたように、良忠門下が六派に分
れる原因は、良忠が意識的に教線の拡張を計ったものでも、
また単なる法脈伝承の上だけのものでもない。間接的にはそ
のようなことになるかもしれない。しかしそれは結果からい
えるだけで、直接の原因は、そんななまぬるいものではない
と思う。良忠門下の分裂は、必然的にそうならざるをえなか
った歴史的事実であり、それが歴史的な発展であることを忘
れてはならない。

彌陀の姿に

吉田由美江

(長野須坂東高校)

修学旅行のある日の午後、山深い大原に三千院を訪れました。高い石垣の御門を通過して中に入り、清掃のいきとどいた長い廊下を静かに進んでいきました。宸殿では襖からそれを越えて壁までも描かれた虹。光線によって七色に変化する虹……が強く印象に残っています。その部屋の前広い庭は一面静かにも古りて、木立はまだ緑の少ない裸木が多く清々しい空気を漂わせ、苔むした地面の一角には西の楽土もかくやと思われる池が清き水を湛えていました。そんな庭園の一角に、ひっそりとたたずんでいる建物、往生極楽院こそ、この世のものとも思われない程、よく辺りの佇まいと調和し静寂な雰囲気をかもし出していました。比較的小さなこの御堂には、その建物に予想できぬほどの大きく立派な金色の弥陀三尊が安置されてありました。極楽浄土からこの世の人を迎えに降りてこられた

瞬間の姿……。前に少し傾いている両の脇士は大和坐りといって、純日本式の坐り方をし、それがまた他の仏像と異なった親近感を抱かせました。

み仏は私たちのすぐ前にあるのです。じつと見おろしてはいますが、それは遙か彼方のものでなしに、私のすぐ前に偉大な体軀で、厳かな中に慈しきをもって抱かばかりに迫っているのです。私は何か父の腕に母の胸に抱かれたような感じさえ受けました。

心なきわが心にも灯はつきぬ

来たり迎ふる弥陀の姿に

私は暫らく対座しました。この偉大な仏様立派な芸術。この仏像に末法思想時代のひたすらに仏にすがろうとする人々の心を探ってみました。厳かな弥陀如来、慈しみの観世音観智に溢れた勢至菩薩。この三体が一つになって一分の隙もない。部屋いっぱい満ちた仏様は、堂内の私たちをすでにその御手の上に救い上げているかの錯覚さえ感じさせる程でした。人は誰でも死の運命を担っている。戦乱絶ゆることのなかった藤原末期の人々は、あちこちに死の運命を見せつけられ、偉

大なるものにすがり何とか救済にあずかりたいと。一般民衆の心は一時として安らぐことがなく、藤原の貴族でさえ満ち足りたであろう日常生活の中に、自ら死の置き所を考えたことでしょう。さし迫った死との対決は遙かに遠い浄土に安坐される仏様では間に合わなくなりました。一刻も早く仏のみ胸にと心の切実さを感じ、それを己れの目の前に現わすことによって心の安らぎを得たことなのでしょう。当時の仏師も心身を清め、懸命に技をふるい精魂こめて作りあげ、後の世の人が単なる芸術作品としてみてくれるであろうなどの気持は微塵もなかったでしょう。それなればこそ私たちもその心に深く思いを致さなければならぬと思いました。

このようにしてわずかな時間でしたが、旅行中今日まで拝観したどの仏様にも増して、み仏から通ってくるものを私なりに感じ、私の心もみ仏はくみ取ってくれたのではないかとさえ思われました。信仰の一片すらなかった私も、そう考えた時この弥陀三尊の姿にすっかり感激し、心に灯のついたような気持ちで三千院を退出しました。

編集後記

○七月・八月はお盆の季節です。ところによって日は違いますが、祖先の霊を迎えて、静かなつどいが、あちらこちらで行なわれることと思います。

流燈の思い思いの

行方かな

○世間をさわがせた吉展ちゃん事件も、犯人がでてきてホットしました。それにしては帰らぬ吉展ちゃんとなつたことは、悲しい限りです。ここに新盆を迎えられるに当り心裏より御冥福を祈つて止みません。

○七月六日は記主禪師（浄土第三代）の御命日。鎌倉光明寺でその開山忌があり佐藤良智先生が、門主代理として代拜された。新しい正装に威儀を正しての儀式

は厳肅そのものでした。佐藤密雄・安居・宮林各先生も随喜されました。

○浄土も今年で三十周年になるということで、同人相会して、記念事業がいろいろと相談された。特輯号の発行。シリーズの作制。座談会・講演会など。

浄土の発展は、教界への大きな力です。相変らぬ皆様の御支援をお願い上げます。

○大正大学浄宗会では、伝道隊を組織して、八月上旬大島に伝道旅行に行くことになった。創価学会のはびこるところへの反撃切り込みと、若い人たちは張り切っている。

○中外日報には、このごろいろいろなエピソードが報ぜられている。

四十年間、ヨーロッパで仏教哲学の講義をし、彼の

地でなくなつた北山淳友博士の著書が、その門弟であつた西ベルリンのヒルデガルドワイドラー女史の手で出版されることになつたというのがその一つ。

愛知県のカササギ慧尼が、十二年間も、牛車を引き、山の通園児の為に、その青春をささげたというのが、別の一つ。

いずれも心温まる話として、ご紹介しておきます。

○九月にアメリカで行なわれる世界宗教学会には、三笠宮始め多くの人が参加します。竹中信常、宮林昭彦、佐藤行信、佐藤良純各先生参加の予定で、いま準備に大わらわです。世界も狭くなりました。一路平安を祈ります。

○暑かったり、すずしすぎたり、天候異変がつづきます。皆さまご自愛第一を。

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 八月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十年七月二十五日 印刷

昭和四十年八月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区根田町一ノ二一
発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

香りたかき浄土トラクト

選択集私解	大正大教授 竹中 信常著	新書判 120P	価 120円 〒 30円
一枚起請文をめぐって	村瀬 秀雄著	新書判 102P	価 120円 〒 30円
真理のはなたば	大正大教授 佐藤 良智著	新書判	価 70円 〒 20円
日常勤行式の解説	村瀬 秀雄著	新書判 90P	価 100円 〒 20円
信仰への導き	文 博 佐藤 賢順著	B 6判 16P	価 15円 〒 10円
こ法語のしおり 葵ぐさ	村瀬 秀雄著	B 6判 16P	価 15円 〒 10円
浄土宗のおしえ	大助 正教 大教授 宮林 昭彦著	新書判 20P	価 25円 〒 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に (多数申込みには)
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に (割引いたします)

発行所 法然上人鑽仰会 電話 (262) 5944
振替 東京 82187

—たのしい本で たのしいあゆみ—

—大道社 こどもの本 シリーズ—

新刊

おしやかさま

B 5判 四〇ページ
価 一三〇円 〓 四〇円

指導 高橋 良和

画 野沢ともかつ

おしやかさまのご生涯のことがらを軸に
こどもの心にはなしかけてくるような文
と画で、おしやかさまのみおしえをえが
きだした、たのしい教育絵本

改訂

めぐみ

B 5判 三二ページ
価 一〇〇円 〓 三〇円

指導 竹中 信常

画 井上与志夫

資料提供 警視庁交通総務課

好評再版にあたり、幼稚園・保育園の
つよいご要望でテストの一部を改訂、
『よいこの交通規則』のページをもうけ
ました。幼児を交通事故からまもるため
に、ひろくおすすめいたします。

発行所 大道社 東京都千代田区飯田町1の21
TEL <262>5944 振替 東京 8247